

訓釈・王弼「老子指略」(二)

「老子指略」訓詁(つづき)

凡そ物の存する所以は、乃ち其の名に反し、功の尅る所以は、乃ち其の名に反す⁽⁹⁰⁾。夫れ存する者の存するを以て存せりと為さざるは、其の亡ぶるを忘れざるを以て也。安らかなる者の安らかなるを以て安らかなりと為さざるは、其の危きを忘れざるを以て也。故に其の存を保つ者は亡び、亡ぶるを忘れざる者は存す。其の位に安んずる者は危く、危きを忘れざる者は安らかなり。善く力ある者は秋毫を舉げ、善く聴く者は雷霆を聞く。此れ道と形と反する也⁽⁹²⁾。

安らかなる者は實に安らかにして、曰く、安の安んずる所に非ずと存する者は實に存して、曰く、存の存する所に非ずと。侯王は實に尊くして、曰く、尊の為す所に非ずと。天地は實に大にして、曰く、大の能くする所に非ずと。聖の功は實に存して、曰く、「聖ヲ絶ツ」の立つる所なりと。仁の徳は實に著らかにして、曰く、「仁ヲ棄ツル」の存する所なりと。故に形を見て道に及ばざる者をして、其の言を忿らざるは莫から使む。

内村嘉秀

夫れ物の本を定めんと欲する者は、則ち近きと雖も而も必ず遠き自りして以て其の始めを證らかにす。夫れ物の由る所を明らかにせんと欲する者は、則ち顯らかなると雖も而も必ず幽自りして以て其の本を絞ぶ。故に天地の外に取りて以て形骸の内を明らかにし、侯王孤寡の義を明らかにするに、「一ヲ得ル」自りして以て其の名の始めを宣ぶ。故に近くを察して流統の原に及ばざる者をして、其の言を誕として以て虚と為さざるは莫から使む。是を以て云云する者は、各の其の説を申べ、人其の辭を美とす。或は其の言を迂なりとし、或は其の論を識る。曉らかなるが若くして昧く、分あるが若くして亂るは、斯れ之に由れり。

名なるものは、彼に定まれるもの也。稱なるものは、謂に従ふもの也。名は彼に生じ、稱は我に出づ。故に之が物として由らざるは無きに涉れば、則ち之を稱して道と曰ひ、之を妙にして出でざるは無きに求むれば、則ち之を謂ひて玄と曰ふ。妙は玄に出で、衆は道に由る。故に「之ヲ生ジ、之ヲ畜ヒ」壅がす塞さず、物の性を通ずるは、道

の謂なり。⁽¹¹⁵⁾「生ジテ有セズ、為シテ恃マズ、長ジテ宰ドラズ」、徳有れども主無きは、玄の徳なり。⁽¹¹⁶⁾玄は謂の深きもの也。⁽¹¹⁷⁾道は稱の大なるもの也。⁽¹¹⁸⁾名號は形狀に生じ、稱謂は渉求に出づ。⁽¹¹⁹⁾名號は虚には生ぜず、稱謂も虚には出でず。⁽¹²⁰⁾故に名號は則ち大いに其の旨を失ひ、稱謂も則ち未だ其の極を盡くさず。⁽¹²¹⁾是を以て玄と謂へば則ち「玄ノ又玄」と、道と稱へば「域中ニ四大有り」といふ也。⁽¹²²⁾

老子の書は、其れ「一言ニシテ之ヲ蔽フ」可きに幾からんか。噫、本を崇び末を息んずるのみ。⁽¹²³⁾其の由る所を觀、其の歸する所を尋ぬれば、言は宗に遠からず、事は主を失はず。⁽¹²⁴⁾文は五千と雖も、之を貫ぬくものは一なり。⁽¹²⁵⁾義は廣瞻と雖も、衆は類を同じくす。⁽¹²⁶⁾其の「一言ニシテ之ヲ蔽フ」ものを解れば、則ち幽にして識られざるもの無し。事ごとに各の意を為せば、則ち辯ずと雖も愈いよ惑ふなり。⁽¹²⁷⁾

嘗試みに之を論ぜん。曰く。夫れ邪の興るや、豈に邪なる者の為す所ならんや。淫の起る所や、豈に淫なる者の造す所ならんや。故に「邪ヲ閉グ」は「誠ヲ存スル」に在りて、善察に在らず。⁽¹²⁸⁾淫を息むるは「華ヲ去ル」に在りて滋章に在らず。⁽¹²⁹⁾「盜ヲ絶ツ」は欲を去るに在りて、刑を嚴しくするに在らず。⁽¹³⁰⁾訟を止むるは「不尚」に在りて、善聽に在らず。⁽¹³¹⁾故に其の為を攻めざる也。其をして為すことに無心なら使むる也。其の欲を害はざる也。其をして欲に無心なら使むる也。⁽¹³²⁾之を未だ兆さざるに謀り、之を未だ始めざるに為す。⁽¹³³⁾斯くの如きのみ。故に聖智を竭して以て巧偽を治むるは、未だ質素を見はして以て民の

欲を静むるに若かず。⁽¹³⁴⁾仁義を興して以て薄俗を敦くするは、未だ樸を抱きて以て篤實を全くするに若かず。⁽¹³⁵⁾巧利を多くして以て民用を興すは、未だ私欲を寡くして以て華競を息むるに若かず。⁽¹³⁶⁾故に司察を絶ち、聰明を潜め、勸進を去り、華譽を弱て、巧用を棄て、寶貨を賤しむ。⁽¹³⁷⁾唯だ民をして愛欲生ぜざら使むるに在るのみ。其の邪を為すを攻むるに在らざる也。⁽¹³⁸⁾故に素樸を見はして以て聖智を絶ち、私欲を寡くして以て巧利を棄つるは、皆本を崇びて以て末を息んずるの謂なり。⁽¹³⁹⁾

夫れ素樸の道著らかならずして、好欲の美隠れざれば、聖智を極めて以て之を察し、智慮を竭して以て之を攻むると雖も、巧は愈いよ精なるを思ひ、偽は愈いよ多變す。⁽¹⁴⁰⁾之を攻むること彌いよ甚だしければ、之を避くること彌いよ勤む。⁽¹⁴¹⁾則ち乃ち智愚相ひ欺き、六親相ひ疑ひ、樸散じ真離れ、事ごとに其の奸有り。⁽¹⁴²⁾蓋し本を捨て末を攻むれば、聖智を極むると雖も、愈いよ斯の災を致す。⁽¹⁴³⁾況んや術の此より下れるものをや。夫れ之を鎮むるに素樸を以てすれば、則ち民窮まりて巧殷なり。⁽¹⁴⁴⁾故に之を攻むるに聖智を以てすれば、則ち民窮まりて巧殷なり。⁽¹⁴⁵⁾故に素樸は抱く可くして、聖智は棄つ可し。夫れ之を察司すること簡なれば、則ち之を避くるも亦た簡なり。⁽¹⁴⁶⁾其の聰明を竭くさば、則ち之を逃るるも亦た察たり。⁽¹⁴⁷⁾簡ならば則ち樸を害すること寡く、密ならば則ち巧偽深し。夫れ能く至察探幽の術を為す者は、唯だ聖智のみに匪ざるか。⁽¹⁴⁸⁾其の害を為すや、豈に記す可けんや。故に「百倍ノ利」も未だ渠多とせざる也。⁽¹⁴⁹⁾

夫れ名を辯ずる能はざれば、則ち與に理を言ふ可からず。名を定むる能はざれば、與に實を論ず可からざる也。凡そ名は形に生ず、未だ形の名に生ずるもの有らざる也。故に此の名有れば必ず此の形有り。此の形有れば必ず其の分有り。仁は之を聖と謂ふを得ず、智は之を仁と謂ふを得ざるは、則ち各の其の實有ればなり。夫れ至微を察見するは、明の極なり。隱伏を探索するは、慮の極なり。能く明を盡極むるは、唯だ聖のみに匪ざるか。能く慮を盡極むるは、唯だ智のみに匪ざるか。實を校べて名を定め、以て「聖ヲ絶ツ」を觀れば、惑ふこと無かる可し。

夫れ敦樸の徳著らかならずして、名行の美顯尚さるれば、則ち其の尚ぶ所を修めて其の譽を望み、其の道とする所を修めて其の利を冀ふ。譽を望み利を冀ひ以て其の行を勤むれば、名は彌いよ美にして、誠は愈いよ外ぜられ、利は彌いよ重んぜられて心愈いよ競ふ。父子兄弟、情を懷して亘を失ひ、孝は誠に任へず、慈は實に任へざるは、蓋し名行を顯にせしことの招きし所なり。俗の薄きを患ひて名行を興し、仁義を崇びて、愈いよ斯の偽りを致す。況んや術の此より賤れるものをや。故に「仁ヲ絶チ義ヲ棄テ、以テ孝慈ニ復ル」も未だ渠弘とせざる也。

夫れ城高ければ則ち衝生じ、利興れば則ち求むること深し。苟しくも無欲を存すれば、則ち「賞スト雖モ竊マズ」なり。私欲苟しくも行はれば、則ち巧利愈いよ昏る。故に「巧ヲ絶チ利ヲ棄テ」、代るに

寡欲を以てすれば、「盜賊有ルコト無シ」も、未だ美とするに足らざる也。

夫れ聖智は、才の傑なり。仁義は行の大なるもの也。巧利は用の善なり。本苟しくも存せずして、此の三美を興すに、害猶は之の如し。況んや術の利有りて、斯を以て素樸を忽にするをや。故に古人に歎有り。曰く、甚しきかな、何物の悟り難きや。既に不聖の不聖為るを知るも、未だ聖の不聖為るを知らざるなり。既に不仁の不仁為るを知るも、未だ仁の不仁為るを知らざる也と。故に「聖ヲ絶チ」而る後に聖の功全く、「仁ヲ棄テ」而る後に仁徳厚し。

夫れ強を惡むは不強を欲するには非ざる也。強を為せば則ち強を失へば也。仁を絶つは不仁を欲するには非ざる也。仁を為せば偽成れば也。其の治を有ちて乃ち亂れ、其の安きを保ちて乃ち危し。「其ノ身ヲ後ニシテ、身先ンズ」。身の先んずるは、身を先にせんとするの能くする所には非ざる也。「其ノ身ヲ外ニシテ、身存ス」。身の存するは、身を存せんとするの爲す所には非ざる也。功は取る可からず、美は用ふ可からず。故に必ず其の功を為すの母を取るのみ。篇に云ふ「既ニ其ノ子ヲ知り」、而して必ず「復タ其ノ母ヲ守ル」と。斯の理を尋むれば、何に往くとして暢びざらんや。

注釈

89、「尅」、克と通用。能、成就よくするの意。

90、『指略』巻頭の文「夫物之所以生、功之所以成、必生乎無形、由乎無名。無形無名者、萬物之宗也」参照。また51章王弼注（注2）も参照。

91、この文、『周易』繫辭傳下の次の文をふまえる。

○子曰、危者、安其位者也。亡者、保其存者也。亂者、有其治者也。是故君子安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘亂。是以身安、而國家可保也。易曰、其亡其亡、繫于苞桑。

孔頴達『周易正義』はこの段を次の如く解釈する。「正義曰、此第五節、以上章有安身之事、故此節恆須謹慎可以安身。故引否之九五以證之。危者安其位者、言所以今有傾危者、由往前安樂於其位、自以為安不有畏懼、故致今日危也。亡者保其存者、所以今日滅亡者、由往前保有其存、恆以為存不有憂懼、故今致滅亡也。亂者有其治者、所以今有禍亂者、由往前自恃有其治理也。謂恆以為治不有憂慮、故今致禍亂也。是故君子今雖復安、心恆不忘傾危之事、國之雖存、心恆不忘滅亡之事、政之雖治、心恆不忘禍亂之事。其亡其亡繫于苞桑者、言心恆畏懼其將滅亡其將滅亡、乃繫于苞桑之固也」。

92、「秋毫」は、秋に獸類の毛先（毫）が細く鋭くなることから、極めて微細なるものの喩につかわれる。「天下莫大於秋毫之末、而大山爲小。莫壽乎殤子、而彭祖爲夭」（『莊子』齊物論篇）。ここでは、

小さく軽いことを喩えている。「雷霆」は雷鳴の響。「鼓之以雷霆」（『周易』繫辭傳上）、「吾驚之以雷霆」（『莊子』天運篇）等、極めて大きな響の喩。この文、前段の「善速在不疾、善至在不行」と同趣旨。「善力」「善聽」の「善」は、27章の「善行」「善言」等の「善」と同じく、相対的な善不善の善ではなく、自然（物之性）に因順する無爲のあり方を示す（注33及び53、61参照）。

93、「道」は「物ノ存スル所以、功ノ尅チル所以」、即ち物が存在し功が成就する根拠（理法）。「形」は、ここではただ単に物の形態かた（視覚・触覚のはたらきによって捉えられる物の空間的形式）を指すだけでなく、道に由って可能となる物の諸特性や徳・はたらき（存・安・善力・善聽・尊・大・聖功・仁徳等）を含む。「反」は、相反・対蹠的關係にあること。

「道ト形ト反ス」とは、「聖功實存、而曰絶聖之所立、仁徳實著、而曰棄仁之所存」の文に即して言えば、「聖功」「仁徳」という「道」のはたらきによって可能となった「形」（功）と、「形」を可能ならしめた「絶聖」「棄仁」という「道」（無為になかったあり方）とは対蹠的であるということ。

94、「實」、虚かろほに対する語で、中身がいつばいにつまんでいることから、嘘・偽りのない真の意となる。

95、以下の文、次の38章王弼注に、より詳細な展開が見える。併せ参考にすると理解し易い。

○故苟得其爲功之母、則萬物作焉而不辭也。萬事存焉而不勞也。用

不以形、御不以名、故仁義可顯、禮敬可彰也。

夫載之以大道、鎮之以無名、則物無所尚、志無所營。各任其貞、事用其誠、則仁德厚焉、行義正焉、禮敬清焉。棄其所載、舍其所生、用其成形、役其聰明、仁則尚焉、義則競焉、禮則爭焉。故仁德之厚、非用仁之所能也、行義之正、非用義之所成也。禮敬之清、非用禮之所濟也。載之以道、統之以母。故顯之而無所尚、彰之而無所競。用夫無名、故名以篤焉。用夫無形、故形以成焉。守母以存其子、崇本以舉其末、則形名俱有而邪不生、大美配天而華不作。故母不可遠、本不可失。仁義、母之所生、非可以爲母。形器、匠之所成、非可以爲匠也。捨其母而用其子、棄其本而適其末、名則有所分、形則有所止。雖極其大、必有不周。雖盛其美、必有患憂。功在爲之、豈足處也。

96、25章經文「故道大、天大、地大、王亦大」、また39章經文「昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、侯王得一以爲天下貞。其致之一也」にもとづく。

また次の39章王弼注も参考にすべきである。

○用一以致清耳、非用清以清也。守一則清不失、用清則恐裂也。故爲功之母不可舍也。是以皆無用其功、恐喪其本也。

○清不能爲清、盈不能爲盈、皆有其母、以存其形。故清不足貴、盈不足多。貴在其母、而母無貴形。貴乃以賤爲本、高乃以下爲基。故致數輿乃無輿也。玉石碌碌、珞珞、體盡於形、故不欲也。

97、19章經文「絶聖棄智、民利百倍。絶仁棄義、民復孝慈。絶巧棄利、盜賊無有。此三者、以爲文不足、故令有所屬。見素抱樸、少私寡

欲。」をふまえる。

「凡物之所以存」以下、「老子指略」の後半部のテーマは、この19章や3章・7章（夫々注139・185参照）等々に見られる『老子』的逆説の論理の解明に置かれている。

98、「絶聖」や「棄仁」等の『老子』の逆説的言辭を指す。

99、「形骸」、からだ・肉体。肉体の外面を「形骸ノ外」というに對し、心・精神・徳を「形骸ノ内」と称す。「今子與我遊於形骸之内、而子索我於形骸之外、不亦過乎」（『莊子』徳充符篇）。郭象注「形骸外矣。其徳内也。今子與我徳遊耳。非與我形交也。而索我外好、豈不過哉」参照。

100、「孤寡」、父を失った子（孤）と配偶者を失った男女（寡）。天子・諸公などが、へりくだって言う自称のことば。39章經文「侯王無以貴高將恐蹶。故貴以賤爲本、高以下爲基。是以侯王自謂孤寡不穀。此非以賤爲本邪、非乎」、42章經文「人之所惡、唯孤寡不穀、而王公以爲稱」。

「得一」、39章經文（注96既引）をうける。「微旨例略」は「道一」につくるが、『王弼集校釋』にしたがって「得一」に改める。

101、「流」、水のながれ、又分かれて一派をなしたものの。「流統之原」は、あらゆる流れを一つに統べる流源即ち一切の始。ここでは前段の文「論太始之原、以明自然之性」の「太始之原」と同じく道を指示する。

102、「誕」、むやみに引きのばしたそらごと。「虚」、実質のともなわ

ないこと。虚誕、おおげさなうそ。

103、「云云者」、前段の「法者」以下の諸学派を指す。

104、「辭」、「微旨例略」は「亂」につくる。『王弼集校釋』にしたがう。

105、「迂」、迂遠、迂闊。

106、「分」、分明、分曉。「亂」、乱雜。

107、「是以云云者……斯之由矣」の文、前段の「而法者尚乎齊同……

蓋由斯矣」の文と照応。

108、後段の文に、「凡名生於形、未有形生於名者也」とある。また『莊

子』逍遙遊篇「名者、實之賓也」の成玄英の疏「然實以生名、名從

實起。實則是内是主、名便是外是賓」参照。

109、「稱」、『康熙字典』から主な意味をひろうと、○知^ん輕重也（唐

韻）○銓也（説文）○揚也。言也。○名號謂之稱。「子者男

子之通稱」○度也。量也。○適^な物之宜^し也。○相等也。○舉也。等

々の意味がある。

「謂」、後文「名生乎彼、稱出手我」を参照すれば、「彼」（客觀

的事物）に対して、主觀的な心中の意を示す。

110、25章經文。「字^{シテ}之曰^フ道」の王弼注「夫名以定形、字以稱可言。

道取於無物而不由也。是混成之中、可言之稱最大也」、また、「域中

有四大」の王弼注「凡物有稱有名、則非其極也。言道則有所由、然

後謂之爲道。然則道是稱中之大也。不若無稱之大也」参照。

111、「玄」、前段の文に「玄也者、取乎幽冥之所出也」とあり、1章經

文「玄之又玄、衆妙之門」の王弼注に「玄者、冥然無有也。始・母之所出也、……衆妙皆從玄而出、故曰衆妙之門也」とある。注43参照。

112、「妙」、1章王弼注「妙者、微之極也。萬物始於微而後成、始於無而後生」参照。

113、この文1章經文「玄之又玄、衆妙之門」をふまえる。

114、10章經文「生之、畜之」の引用。

115、右10章經文の王弼注に「不塞其原也」「不禁其性也」とある。また注参53照。

116、右10章經文に続く文「生而不有、爲而不恃、長而不宰、（是謂玄德）」の引用。

117、右經文の王弼注に「凡言玄德、皆有德而不知其主、出乎幽冥」とある。注43参照。

118、21章王弼注に「窈冥、深遠之歎」とある。窈冥は幽冥に同じで、奥深く微かなさま。65章經文に「玄德深矣、遠矣」とある。

119、注36・37に既引の25章王弼注参照。

120、名（名號）と稱（稱謂）。

「名」も「稱」も一般的にはものの名稱であるが、王弼は兩者を區別している。

「名」は、「名也者、定彼者也」、「名號生乎形状」と規定される。また「凡名生於形、未有形生於名者也。故有此名必有此形、有此形必有此分。仁不得謂之聖、智不得謂之仁、則各有其實矣」と言われ

る。「形」はある物・事が他の物・事と明確に区別されうる（分）その物・事に特有の形式と考えてよく、「名」はこの「形」を「實」として、（認識主観に対して）客観的に実在する物や事（「彼」）につけられる名称である。ただし、通常、物や事にかかわる是非・善悪・貴賤等々の価値評価をも伴っている。「實」は、物・事の実体・実質・実情・実績等を意味する。

王弼は「凡名生於形」とするから、道の如き「無形」のものに対しては名を定めることはできないとする。

25章経文に「有物混成、先天地生。寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆、可以爲天下母。吾不知其名、字之曰道」とある。『老子』は、道は名ではなく「字」であるとしている。字は『儀禮』、「士冠禮」に「冠而字之、敬其名也」とあるように、元服の時、名（実名）を尊んで、名と区別してつけられる呼称である。『莊子』則陽篇に「道之爲名、所假而行」とあるのは、道が名ではなく、字であることを説明したものである。王弼は、右25章経文「吾不知其名」と「字」に夫々「名以定形。混成無形、不可得而定、故曰不知其名也」、「夫名以定形、字以稱可言。道取於無物而不由也。是混成之中、可言之稱最大也」と注し、字は「稱」に関するものであるとしている。では、名と区別される「稱」は、如何なる種類のことなのか。稱は「稱也者、從謂者也」「稱出乎我」「稱謂出乎涉求」と規定される。「渉求」は、対象の本質的なあり方に深く入っていくようにする心の能動的な作用であるから、稱はその成立の根拠を主観的な心

中の意においている。前段の文に「夫道也者、取乎萬物之所由也。玄也者、取手幽冥之所出也。深也者、取乎探賾而不可究也。大也者、取手彌綸而不可極也。遠也者、取手綿邈而不可及也。微也者、取乎幽微而不可覩也」とあった。道・玄・深・大・微・遠等のことばは、対応する實が客観的に実在していない抽象的概念語で、これが「稱」であると考えられる。

では、王弼はなに故にことばに名と稱との区別を導入したのであろうか。その理由は以下の如く考えられる。『老子』は、道は具體的事物のように人間の感覚で捉えられうるものでなく、それ故言葉で表現し尽くすことの不可能なものであるとしながらも、しかも尚、道について様々に説明しようとする。『老子』に於ける、否定的・逆説的な、あるいは譬喩的な、「文学」的と言ってもよい道に関することばや言説は、この矛盾の上に立って、しかもこの矛盾をのり越えようとする所に成立している。

王弼は、清談が流行し名理の学が重んぜられた時代の注釈家である。彼は『老子』の道を「文学」的に説明することに満足できず、「夫不能辯名、則不可與言理、不能定名、則不可與論實也」と言うように、與ニ實ヲ論ジ、與ニ理ヲ言フ場に、『老子』の思想を持ち込もうとした。名と稱を区別し、道は名ではなく稱に属することばであると規定することで、王弼は、道という「名」に対応する実体的な何かが存在するのだと考える立場（道を実体的にとらえようとする立場）への批判を表明し得たことになる。名と稱との区別の導

入に、我々は、『老子』解釈に際して、どこまでも論理的に考え、論理的に説明していこうとした王弼の意欲と工夫の一端を見ることが出来る。

121、「虚」、もと墳墟ほむの意から、実体のないもの・ことを指す。この文、名號も稱謂も（夫々必要性があつて成立するもので）決して虚妄に成立するものではないことを言う。

122、道を名號と考えると、「道」という名號に対応する實が（実体として）客観的に存在することになってしまふから、道ということば（稱）で意味しようとした「物トシテ由ラザルハ無シ」という本旨を完全に喪失してしまうことになる。

123、ここで「極」は、注36既引の25章王弼注等を参照すれば、道の当体そのものを指す。この注で王弼は「凡物有稱有名、則非其極也」と言い、「道」は「稱中の大」なるもの即ち稱謂で表現してしまつてゐるものだとする。そして経文「域中有四大」の「域」を「無稱」と解釈し、「稱中の大」は「無稱の大」に及ばないと言う。即ち、稱謂のとどかない領域（域）にある道の当体そのものの（極）は、稱謂で表現されたものよりも「大きい」というのである。要するに、稱謂は、いかに表現を工夫してみても「無稱」の領域にある道の当体そのものの（極）を表現し尽すことはできないということである。これは、ことばでは表現し尽せないものを、ことばで説明しようとするという矛盾が、『老子』の道に関連する言説の根底に存在していることを改めて確認している文と位置づけることがで

きる。

124、1章経文からの引用。王弼注は注43参照。

125、25章経文「故道大、天大、地大、王亦大。域中有四大」からの引用。王弼注は注36参照。

なお、この段落の名號と稱謂に関する論述は、次に引用の前段の文と照応関係にある。解釈にあたつて相い参照すべきである。

○……名之不能當、稱之不能既。名必有所分、稱必有所由。有分則有不兼、有由則有不盡。不兼則大殊其真、不盡則不可以名。此可演而明也。夫道也者、取乎萬物之所由也。……然則道・玄・深・大・微・遠之言、各有其義、未盡其極者也。然彌綸無極、不可名細。微妙無形、不可名大。是以篇云、字之曰道、謂之曰玄、而不名也。

126、「幾」、近也（集韻）。「一言而蔽之」は、『論語』爲政篇第二に「子曰、詩三百、一言而蔽之、曰思無邪」とあるにもとづく。「蔽」は「蔽猶當也」（『論語集解』）。

127、「崇本息末」、注62参照のこと。「而已矣」は、限定と断定の語氣を含んだ終尾詞。「子曰、參乎、吾道一以貫之。……曾子曰、夫子之道忠恕而已矣」（『論語』里仁第四）。「而已矣者、竭盡而無餘之辭也」（朱子『論語集注』）。

128、「所由」「所歸」は、注57参照。

129、70章経文「言有宗、事有君」をふまえる。王弼注「宗、萬物之主也。君、萬事之主也」。又注2参照。

130、「文雖五千」、「史記」老子韓非列傳に「……於是老子迺著書上下

篇、言道徳之意五千餘言而去。莫知其所終」とある。

131、注127既引の『論語』里仁篇の「吾道一以貫之哉」をふまえる。王弼はこの一句に次の如き注解を加えている。

○貫、猶統也。夫事有歸、理有會。故得其歸、事雖殷大、可以一名舉。總其會、理雖博、可以至約窮也。譬猶以君御民、執一統衆之道也」（皇侃『論語義疏』引、王弼『論語釋疑』）

132、「廣瞻」、「廣」はるか・遠い、大きい、広い等の仮借。「瞻」、視也。「曠瞻」は、はるか遠くを眺める意。ここでは、ぼんやりしているの意か。

133、「幽」、隠・潜・深・微・冥等の意がある。

134、「爲意」、「意」は私意、おもわく。「爲意」とは、己のおもわく、見解に固執すること。前段の文「順其所好而執意焉」の意と同じ。恐らくは『論語』子罕篇第九の「子絶四、毋意、毋必、毋固、毋我」の「意」を承ける。魏の何晏『論語集解』は「以道爲度、故不任意也」と解し、梁の皇侃『論語義疏』は「凡人有滞、故動靜委曲自任用其意。聖人無心、泛若不係舟、豁然同道、故無意也」と注解する。

135、「閑邪在乎存誠」、『周易』乾卦・文言傳中の句をふまえる。

「九二曰、見龍在田、利見大人、何謂也。子曰、龍徳而正中者也。庸言之信、庸行之謹、閑邪存其誠、善世而不伐、徳博而化。易曰、見龍在田、利見大人、君徳也。」

孔穎達『周易正義』は、この句を「防閑邪惡、當自存其誠實也」

と解する。

136、「善察」、後段の文に「夫能爲至察探幽之術者、匪唯聖智哉」、「夫察見至微者、明之極也。探射隱伏者、慮之極也。能盡極明、匪唯聖乎。能盡極慮、匪唯智乎」とあるを参照。

また58章王弼注「立刑名、明賞罰、以檢姦僞、故曰其政察察也」18章經文「慧智出、有大僞」の王弼注「行術用明、以察姦僞、趣覩形見、物知避之。故智慧出則大僞生也」参照。

137、「去華」、38章經文「前識者、道之華而愚之始。是以大丈夫處其厚、不居其薄、處其實、不居其華。故去彼取此」をふまえる。また20章王弼注に「人皆棄生民之本、貴末飾之華」とあり、38章注に「守母以存其子、崇本以舉其末、則形名俱有而邪不生、大美配天而華不作」とあるを参照。

138、「滋章」、57章經文「法令滋彰、盜賊多有」をうける。

139、19章經文（注97既引）参照。また3章經文「不尚賢、使民不爭。不貴難得之貨、使民不爲盜、不見可欲、使民心不亂。是以聖人之治、虛其心、實其腹、弱其志、強其骨。其使民無知無欲、使夫智者不敢爲也」参照。

140、前段の文「而法者尚乎齊同、而刑以檢之。……夫刑以檢物、巧僞必生。……斯皆用其子而棄其母。物失所載、未足守也」参照。

141、この文、3章經文の他に、恐らくは『論語』顔淵篇第十二の「子曰、聽訟、吾猶人也。必也、使無訟乎」がふまえられている。『周易』訟卦、大象傳「天與水違行、訟。君子以作事謀始」の王弼注に

「聴訟、吾猶人也、必也使無訟乎。无訟在於謀始。謀始在於作制。

契之不明、訟之所以生也。物有其分、職不相濫、爭何由興。訟之所以起、契之過也。故有德司契而不責於人」とある。この大象傳注は『老子』79章經文「和大怨、必有余怨、安可以爲善。是以聖人執左契、而不責於人。有德司契、無德司徹」がふまえられている。

142、「無心於○」は3章經文の「虛其心」に同じ。「使其無心於爲也」「使其無心於欲也」は夫々3章經文の「使夫智者不敢爲也」、「常使民無知無欲」の意。

143、64章經文「其安易持、其未兆易謀（王弼注「以其安不忘危、存之不忘亡、謀之無功之勢、故曰易也」）、其脆易泮、其微易散。爲之於未有、治之於未亂」をふまえる。

144、「質素」、素樸に同じ。「見質素以靜民欲」、37章經文「道常無爲而無不爲。侯王若能守之、萬物將自化。化而欲作、吾將鎮之以無名之樸。無名之樸、夫亦將無欲。無欲以靜、天下將自定」参照。

145、「篤實」、心の本来の徳。後段の「敦樸之徳」に同じ。16章王弼注「言致虚、物之極篤、守静、物之真正也」、38章王弼注「竭其聰明以爲前識、役其智力以營庶事、雖得其情、姦巧彌密、雖豐其譽、愈喪篤實」参照。

146、「華競」、20章王弼注「衆人迷於美進、惑於榮利、欲進心競」参照。「華」は、根本の道に対して末飾のものを喩える。

147、「司察」、司、伺（よ）の仮借。

148、「華譽」、前段の文に「儒者尚乎全愛、而譽以進之。……譽以進物、

爭尚必起」とあるを参照。

149、64章經文「是以聖人欲不欲、不貴難得之貨」、王弼注「好欲雖微、爭尚爲之興、難得之貨雖細、貪盜爲之起也」参照。

150、「唯在使民愛欲不生、不在攻其爲邪也」、次の『論語釋疑』の文、この句の趣旨を理解する上で参考になる。

○夫推誠訓俗、則民俗自化。求其情僞、則險心慈應。是以聖人務使民皆歸厚、不以探幽爲明、務使奸僞不興、不以先覺爲賢。故雖明並日月、猶曰不知也。（皇侃『論語義疏』泰伯篇第八「子曰、狂而不直、伺而不顯、慳慳而不信、吾不知之矣」の条引）

151、「嘗試論之曰」以下、この段の文、19章經文（注97参照）をふまえる。

152、65章王弼注「以智術動民、邪心既動、復以巧術防民之僞。民知其術、隨防而避之。思惟密巧、奸僞益滋、故曰以智治國、國之賊也」参照。

153、57章經文「人多伎巧、奇物滋起」の王弼注「民多智慧、則巧僞生、巧僞生、則邪事起」参照。

154、「六親」、18章經文「六親不和、有孝慈」、王弼注「六親、父子、兄弟、夫婦也」。

155、28章經文「樸散則爲器」、王弼注「樸、真也。真散則百行出、殊類生、若器也」参照。

156、57章經文「法令滋彰、盜賊多有」の王弼注「立正欲以息邪、而奇

兵用、多忌諱欲以止貧、而民彌貧。利器、欲以強國者也。而國愈昏弱。皆舍本以治末、故以致此也」参照。

157、37章經文「化而欲作、吾將鎮之以無名之樸」をふまえる。

158、57章經文「故聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸」をふまえる。王弼注に「此四者、崇本以息末也」とある。

159、「殷」、大・衆多・盛・繁等の意あり。

160、「至察探幽之術」、「至」は伺の仮借。「幽」は隱。後段に「察見至微者、明之極也。探射隱伏者、慮之極也」とある。

161、「匪」、非に同じ。

162、19章經文「絶聖棄智、民利百倍」をふまえる。

163、「渠多」、「渠」、大也。巨に通ず。「未渠多」は、百倍の利という表現が決しておおげさではないことを示す。

164、この段、「聖智」(明察)による政治を有為の政治として厳しく批判するが、49章經文「聖人皆孩之」の王弼注に、より詳細な展開が見え、この段の論述を適確に把握する上に役立つ。

○皆使和而無欲、如嬰兒也。夫天地設位、聖人成能、人謀鬼謀、百姓與能者、能者與之、資者取之、能大則大、資貴則貴。物有其宗、事有其主。如此則可冕旒充目而不懼於欺、黜黜塞耳而無戚於慢。又何爲勞一身之聰明、以察百姓之情哉。夫以明察物、物亦競以其明應之、以不信察物、物亦競以其不信應之。夫天下之心不必同。其所應不敢異、則莫肯用其情矣。甚矣、害之大也。莫大於用其明矣。夫任

智則人與之訟、任力則人與之爭。智不出於人而立乎訟地、則窮矣。力不出於人而立乎爭地、則危矣。未有能使人無用其智力於己者也。如此、則己以一敵人而人以千萬敵己也。若乃多其法網、煩其刑罰、塞其徑路、攻其幽宅、則萬物失其自然、百姓喪其手足、鳥亂於上、魚亂於下。是以聖人之於天下歎歎焉、心無所主也。爲天下渾心焉、意無所適莫也。無所察焉、百姓何避。無所求焉、百姓何應。無避無應、則莫不用其情矣。人無爲舍其所能、而爲其所不能、舍其所長、而爲其所短。如此、則言者言其所知、行者行其所能。百姓各皆注其耳目焉、吾皆孩之而已。

165、「辯名」、「辯」、辨の仮借。「辨」、判る、別る、明らかにする、治める、正す等の意がある。「辨名」は、名の正確な意味、使い方をを明らかにし正すこと。

166、「定名」、「實」に対応した名を確定し、名・實の一致を実現すること。

167、「隱伏」、「伏」、隠れ潜むこと。「探射」、探りあてること。

168、「校」、あれこれとくらべ調べること。

169、19章經文「絶聖棄智、民利百倍」。

170、「名行之美」、仁義等の、世間の評判になるような名目の立派な行い。

171、「敦樸之德不著」と「名行之美顯尚」とは相関関係にある。この段は、内容的に18章經文「大道廢、有仁義。慧智出、有大偽。六親

不和、有孝慈。國家昏亂、有忠臣」と密接な関連をもっている。王弼注「甚美之名、生於大惡、所謂美惡同門。……若六親自和、國家自治、則孝慈忠臣不知其所在矣。魚相忘於江湖之道失、則相濡之德生也」参照。

また次の『論語釋疑』の文もこの句を理解する上に大いに参考になる。

○聖人有則天之德。所以稱唯堯則之者、唯堯於時全則天之道也。蕩蕩、無形無名之稱也。夫名所名者、生於善有所章而惠有所存。善惡相須、而名分形焉。若夫大愛無私、惠將安在。至美無偏、名將何生。故則天成化、道同自然、不私其子而君其臣。凶者自罰、善者自功。功成而不立其譽、罰加而不任其刑。百姓日用而不知所以然、夫又何可名也。（『論語』泰伯篇第八「子曰、大哉、堯之爲君也、巍巍乎唯天爲大、唯堯則之。蕩蕩乎民無能名焉」、の皇侃『論語義疏』引）
172、「其所道」、1章經文の「道可道、非常道」の「可道」の道。夫々の学派の尊重する道。

173、「誠」、徳目（名）としての誠ではなく、人が具有している本来の誠実さ。篤実。38章王弼注「下徳求而得之、爲而成之、則立善以治物、故徳名有焉。求而得之、必有失焉。爲而成之、必有敗焉。善名生、則有不善應焉」、「夫載之以大道、鎮之以無名、則物無所尚、志無所營。各任其貞、事用其誠、則仁徳厚焉、行義正焉、禮敬清焉」参照。

174、「懷情」、「懷」、いだく、包^こみつつんでかくす（「正字通」懷、藏

也。曲禮、賜果于君前、有核者懷其核。」「情」、外物に感応しておこる、喜怒哀楽怨等の心のはたらき、心意。

175、「直」、心の本来の素直さ。

176、19章經文の引用。

177、「衝」、衝車、輻車。古代の攻城用の戦車。

178、『論語』顔淵篇第十二、「季康子患盜、問於孔子。孔子對曰、苟子之不欲、雖賞之不竊」にもとづく。「竊」、他人のものをひそかに奪うこと。

179、19章經文にもとづく。

180、19章王弼注には「聖智、才之善也。仁義、行之善也。巧利、用之善也」とある。

181、「忽」、心がそこに存在せず、はっきりしないままで見過していること。ないがしろにする。ゆるがせにする。

182、「何物」、輕蔑する語。

183、52章經文「守柔曰強」、王弼注「守強不強、守柔乃強也」参照。

184、38章王弼注に「夫仁義發於内、爲之猶僞」とあり、又「凡不能無爲而爲之者、皆下徳也。仁義禮節是也。……本在無爲、母在無名。棄本捨母、而適其子、功雖大焉、必有不濟、名雖美焉、僞亦必生。不能不爲而成、不與而治、則乃爲之。故有宏普博施仁愛之者」とあるを参照。

185、7章經文「天長地久。天地所以能長且久者、以其不自生、故能長

生。是以聖人後其身而身先、外其身而身存。非以其無私邪、故能成其私」からの引用。王弼注「自生則與物爭、不自生則物歸也」参照。

186 次の諸注を参照。

○因物而用、功自彼成、故不居也。（2章經文「功成而弗居」の注）

○使功在己、則功不可久也。（同右「夫唯弗居、是以不去」の注）

○此三者、言常反終、後乃德全其所處也。下章云、反者道之動。功不可取、常處其母也。（28章經文「知其榮、守其辱、爲天下谷。爲天下谷、常德乃足、復歸於樸」の注）

○德者得也。常得而無喪、利而無害、故以德爲名焉。何以得德、由乎道也。何以盡德、以無爲用。以無爲用、則物莫不載也。……是以上德之人、唯道是用、不德其德。無執無用、故能有德而無不爲。不求而得、不爲而成、故雖有德而無德名也。（38章注）

○仁義、母之所生、非可以爲母。形器、匠之所成、非可以爲匠也。捨其母而用其子、棄其本而適其末、名則有所分、形則有所止。雖極其大、必有不周。雖盛其美、必有患憂。功在爲之、豈足處也。（38章注）

○用一以致清耳、非用清以清也。守一則清不失、用清則恐裂也。故爲功之母不可舍也。是以皆無用其功、恐喪其本也。（39章經文「天無以清將恐裂」の注）

187、52章經文「天下有始、以爲天下母。既得其母、以知其子、既知其子、復守其母、沒身不殆」を指す。

188、「老子指略」前段の文に「…四象形而物所主焉、則大象暢矣。五音聲而心無所適焉、則大音至矣。故執大象則天下往、用大音則風俗移也。無形暢、天下雖往、往而不能釋也。希聲至、風俗雖移、移而不能辯也」とあるを参照。

（本学助教教授・中国文学）